

主 題：栄光の希望を見失わないために3
聖書箇所：ローマ人への手紙 8章23-25節

自然界の希望、被造物の希望について、私たちは前回見ました。8：19-21でパウロが言ったことは、この自然界も新しくされることを切望しているということでした。のろわれた状態から新しい状態へと変えられることを待望していると、彼は教えたのです。自然界は束縛から解放されること、また、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられること、そのことを望んでいると言います。そのことを語ったパウロは、実は、新しくされることを待望しているのは自然界だけではなくて、間違いなく、私たち信仰者もその通りであると、そのことを今日私たちが見ようとしている23節から教える訳です。自然界も待望しているが、私たち信仰者はそのことをもっと願っていると。ですから、特にこの23節を見ると、日本語の聖書にも少しは出ていますが、パウロは「私たち」ということばを繰り返して使っているのです。自然界以上に私たちは新しくされることを願っていると、そのことを強調したかったからです。それはパウロから言われなくても私たち信仰者はみなそうです。私たちは新しくされること、主にお会いすること、永遠をとともに過ごすこと、そのことを待望しながら今日生きている者たちです。

今日、私たちはこの23-25節を見て行きますが、前回、私たちは「自然界の希望に対する態度」を見ました。今日は23-25節から「希望に対するクリスチャンの態度」、私たち信仰者の態度を見ます。どのような思いをもってそのすばらしい時を待っているのか、パウロは大切なことを私たちに教えてくれます。最初に、パウロは「信仰者の希望に対する態度」として二つのことを教えます。ぜひ、注目しましょう。一つは「備える」ことであり、もう一つは「忍耐する」ことです。パウロはこの二つをクリスチャンの希望、望みに対する態度として教えています。

A. 希望に対するキリスト者の態度 23節

1. 備える：「心の中でうめきながら」

23節を見てください。「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」、特に「心の中でうめきながら」と書かれていることに注目してください。「心の中で」とは私たちの内側のことです。私たちの内側からそのような思い、「うめき」が出て来るというのです。「うめき」とは心の内にある深い悲しみのことです。パウロは「信仰者は、心の内に大変深い悲しみを持っている。そして、その悲しみは継続してうめき声を上げていると、その様に言うのですが、この内側に持っている悲しみとは何のことでしょうか？何を指しているのでしょうか？パウロは「罪を嘆き悲しんでいる」と言うのです。罪に対する悲しみです。ヨハネは、今私たちが見ていることをこのように言い表わしています。Iヨハネ3：3「キリストに対するこの望みをいただく者はみな、…」と言い、この前の2節を見て見ると「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」とあり、私たちはキリストに似た者に変えられること、栄光のからだをいただくという、その希望についてこのように言って、そして、3節のことばが続くのです。キリストに対する望み、新しくされること、キリストに似た者とされるという「望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」と、つまり、ヨハネも今見ているパウロも同じことを言うのです。

主によって贖われた者たち、救われた者たちは、主に喜んでいただきたい、主が喜ばれるように生きて行きたいと、そのような願いをいただいたのです。言い方を変えるなら、そのような願いをいただいているから救われているのです。神はそのような願いを救われた者たちに与えてくださったからです。もちろん、すべての点で完全に清く正しく歩むことができないのが現実です。だから、うめくのです。だから、悲しむのです。望んでいることと実際にしていることが余りにも違うからです。しかし、少なくとも、私たちはそのような人物に生まれ変わったのです。しかも、先ほど見たように、キリストに似た者に変えられる、その日が本当に近づいているということを考えれば考えるほど、私たち信仰者は今日を正しく生きようと思うはずで。

皆さん、考えたことはありませんか？主のもとに引き上げられるのはどのような瞬間か？どのようなときに引き上げられたいか？と。私は考えることがあります。いろいろな候補がある訳で、神に喜ばれることをしているとき、これは理想的です。最悪のケースは罪の中を歩んでいるときです。神に逆らっているときは「すみません、今は困ります。もう少し時間をください」と思うほど、だれしも主の前に

正しいことをしているとき、喜ばれることをしているときにこの地上での人生を終えることができるなら…と願います。でも、皆さん、そのためにはそれが「今日かも知れない」という思いを持って生きなければそのような備えなど出来ません。私たちはどこかで「まだ1年ある、1年はなくても半年ある。少なくとも、明日は絶対にやって来ない。」などと思っているのではないですか？でも、最近の様々な天災を見たりすると、だれしも予知することはできない、いつ、そのようなことが私たちの身に起こるかも知れません。つまり、明日のことはだれにも分からないのです。でも、分かっていることは、私たちが主の前に立つということです。だからこそ、私たちは今日という日を正しく生きようとするのです。

パウロが言っていることは、信仰者はその様に主の前に立つ、そのことを覚えているゆえに今日を正しく生きて行こうとする、それゆえに、心の中に深い悲しみがある、主に喜ばれたいのにその様な歩みをしていない自分がいるということです。皆さん、感謝だと思いませんか？神はそのことをご存じで、私たちが罪を告白するなら何度でも赦してください、何度でも私たちを迎えてくださるのです。しかし、少なくとも私たちが覚えなければならないことは、私たち信仰者はこのように心の中にうめきを持っている、罪に対する悲しみを持っているということです。なぜなら、イエスにお会いするかもしれないからその備えをしておきたいというその思いが、自分を神に喜ばれる者へ、その歩みへと変わって行きたいという願いを持って歩むからです。

2. 忍耐する 23節

23節「…子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」「待ち望んで」いることは8：19で見ました。待ち望んで一日千秋の思いをもってその日を待っている、その瞬間を待ち焦がれているということです。期待をもって、もちろん、忍耐をもってその日を待っているのです。私たちは信仰をもって以来、主が来られることをずっと待っています。1年経ち、5年経ち、10年経ち、まだ、その瞬間その日が訪れていません。でも、必ずその日が来るのですから、私たちは忍耐をもってその日を待望しているのです。

では、パウロが言う「忍耐をもって待っていること」は何でしょう？彼は二つのことを言います。

◎忍耐をもって待っていることは？

(1) 子にさせていただくこと

このことも私たちはすでに見て来ました。養子のことです。ローマ8：15に「…子としてくださる御霊を受けたのです。」とありました。子どもとされる、子どもである身分、また、養子にされると、その意味があることを見ました。私たちはもうすでに「子どもとされた」のです。でも、23節には「子にさせていただくこと、…待ち望んでいます。」とあるから、まだ子どもとされていないのかと思いませんか？なぜなら、23節はこれから先のことを語っているからです。15節で私たちはもうすでに子どもとされたと言っているのに、23節を見ると、子どもとされることを待ち望んでいると将来のことを言っているからです。ある人は「では、私たちは何度も子どもとされる必要があるのか？」と言いますが、答えはNOです。「子とされる」ことは一度だけのことです。では、子どもとされた者が子どもとされることを待ち望むとはどういう意味なのか？ここでパウロが言わんとしていることは、将来における祝福のことです。将来に与えられる祝福のことを言っているのです。

私たちは「子にさせていただく」ということばを聞くとすぐに「救いのこと」と思いが行きますが、パウロはここでは、イエスを信じる者たちにすでに与えられた罪からの赦し、救いのことを言っているではありません。イエスを信じた私たちは、今、神の子どもとして特別な祝福をいただきながら生きているということです。でも、それで終わりではないのです。後にはもっとすばらしい祝福が待っていると言うのです。ジョン・マレーという神学者は「このことばは現在の特権と将来与えられるものとの両方に用いられている。」と言います。つまり、このことばは今のことだけでない、将来のことも含めた両方の意味があるということです。このような用いられ方は、たとえば、「救い」ということばに関してもなされています。エペソ1：7にはこのように書かれています。「私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。」と、これは過去のことです。私たちはもう「御子の血による贖い」、イエス・キリストの犠牲による救い、すなわち、罪の赦しを受けている、もうすでにいただいているのです。イエスを信じた私たちはすでに救われたのです。それであつて、ピリピ人への手紙2：12を見ると「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であつたように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いを達成してください。」と、救いのことが記されています。「自分の救いを達成してください。」と、これは先のことです。そうすると、「救い」ということばも、イエスを信じた私たちにすでに与えられていると言い、ピリピ2：12では「愛する人たち」とクリスチャンに対して「自分の救いを達成してください。」と、これからのこと、未来のことを言うのです。ですから、過去のことであつたり未来のこと

あったりするのです。今、私たちが見ているこのローマ8：23の「子にさせていただくこと」、「神の子どもとされる」ということも、過去、そして、現在のことだけでなく、そこには未来のことも含まれているのです。というのは、私たちは子どもとされていながら、まだ、子どもに約束されたことのすべてを得たのではないからです。なぜなら、私たちには栄光のからだを約束されていても、まだ、栄光のからだをいただけていないからです。つまり、約束されているけれど、まだ、私たちが実際にいただけていないものがあるのです。将来のことです。

先に見たⅠヨハネ3：2でヨハネは、今ローマ8：23で学んでいることをとても分かり易く記しています。「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。」と、もうすでに救われているということです。その後「後の状態はまだ明らかにされていません。」と、これは未来のことです。「しかし、キリストが現われたなら、」と未来のことです。「私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」と、確かに、もう神の子どもだけれど、神の子どもに約束されているすべてが与えられた訳ではないのです。約束は後にも残っていると言うのです。ですから、ここでパウロは私たちに与えられた救いが不完全であると言っているのではないということです。私たちは完全な救いをいただいたのです。私たちがイエス・キリストを救い主と信じた瞬間に私たちの罪は赦されて、神の前に立つことができる、義と認められた、このすばらしい救い、特権をいただいたのです。しかし、義認と同時に始まった「聖化」、あなたを主に似た者へと変えて行くその働きはまだ継続しています。そして、後にあなたが栄光のからだに変わられるという「栄化」という出来事はまだ先のこと、未来のことです。そして、それを得るためにはまだ時間がかかるということです。

私が今話していることは、次のような例えを話すと少し理解できるかも知れません。先日、私はネットで買い物をしました。あるCDが欲しかったのでネットで注文して支払いを済ませました。翌日にメールが届いて、もうすべて準備できたが、そのCDは2回に分けて届ける、1回目はこの日に送るということで私は楽しみにしていました。その通りに届きました。それから数日間、私は家の者に「まだ届いていないか？」と何度も聞き続けたのです。ネットには送る日が書かれているのですが、早く来ないかな？と待ち遠しかったのです。ちゃんと届きました。支払いが済んでいるからもうすでに私のものでしたが、配送が2回に亘ったことでそのような思いをしました。神はあなたにすばらしい約束を与えてくださった、永遠の祝福の約束をくださったのです。一部はいただきました。でも、まだ次の配送があるのです。だから、私たちは待っているのです。パウロは私たちに、すばらしい栄光のからだをいただくという約束があるけれど、でも、それをいただく日を私たちは待たなければいけないと、そのことをここで言っているのです。

(2) からだの贖われること

23節「私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」と、今私たちが見ているように、栄光のからだに変わられることです。ピリピ3：21に「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」とありますが、これは約束です。その日が必ず来ます。私たちはこの罪のからだを脱ぎ捨てて、栄光のからだを着る日がやって来ます。神はそのように私たちに約束してくださった、それが私たちの希望です。その日を私たちが覚えるとき、確実に、その日はやって来るけれど、その日に至るまでのこの地上の生活を見たときに、私たちが理想としている生き方と現実が余りにも違うのです。私たちはそのことを嘆き悲しむのです。そして、自然界が新しくされることを待望するのと同じように、私たちも早くこのからだを脱ぎ捨てて、栄光のからだを着たいと、その様に願いながら歩むのです。パウロはそのことを私たちに教えるのです。希望に対するこのような態度を持っているのです。

次に移る前に、Ⅱコリント5：1-4を見てください。今、私たちが学んでいることをパウロはこのような表現をもって教えています。「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。：2 私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。：3 それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。：4 確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちのちにのまれてしまうためにです。」、この「地上の幕屋」、「幕屋」とは私たちの肉体を指しています。「神の下さる建物」、これは栄光のからだのことです。私たちに与えられている約束です。それは「人の手によらない」とあります。この世の被造物と違うと言うのです。神が与えてくださる新しいものです。そして「天にある永遠の家」、また、2節には「天から与えられる住まい」と書かれています。これは「永遠のからだ」です。栄光のからだ、そして、永遠に続くものです。3節には「裸の状態になることはないからです。」とあります。この新しいからだは実体のないものではなくて、確実に与えられるもので

あり、その「栄光のからだ」を私たちは間違いなくいただくと、パウロはここでも私たち信仰者に与えられたすばらしい希望を、このような表現をもって現わしているのです。

信仰者の皆さん、いずれにしろ、この約束は信仰者であるあなたに与えられている約束です。私たちは少なくとも、将来を見て、そこに約束されているすばらしい約束を覚えて今日を生きることが出来ます。地上の生活が終わっても、この肉体の生活が終わっても、私たちにはその後すばらしい神の約束が与えられていて、その約束を私たちは確実に経験するのです。私たちが今、考えなければいけないことは、私たちはこのような約束をいただいています、その約束をいただいている者として、今日をどのように生きて行くのか？ということです。パウロが私たちに教えてくれたように、彼自身はその約束をいただいている者として心の中でうめいていました。すばらしい天国の約束が与えられたから「良かった！では、今日を好きに生きて行きましょう。」と、そのようには生きなかったのです。すばらしい約束をいただいている者として今日を正しく生きよう、もしかすると、今日が最後の日かも知れないから今日正しく生きて、主にお会いできるその備えをして行こう、罪から離れて歩いて行こうと、希望をもって生きている者たちは、その様な歩みを実際に今日行なっているのです。

適用：ですから、このように言えます。栄光のからだを待望している者は、罪を憎む生活を送る者であると。なぜなら、その日は今日来るかも知れないからです。信仰者の皆さん、明日のことを思い煩うことよりも、今日をどう生きるかを考えることです。いろいろな心配があります。将来を考えるなら不安がいっぱいです。でも、大切なことは今日を正しく生きることです。なぜなら、私たちに明日はないかも知れないからです。神が望んでおられることは、希望をいただいている者たちが今日主の前を正しく生きて行くことです。

B. この態度が証明すること 23節

今、私たちが見て来たこのような態度が証明することについて、パウロは二つのことを教えています。一つは、このような態度をもって生きる人たちは間違いなく「救われている」と、もう一つは「神を心から愛している」と言います。

(1) 救われていること：23節「御霊の初穂いただいている私たち自身も」

この「いただいている」という動詞の現在分詞の使い方を見ると、これは原因を表わす使い方をしてしています。つまり、パウロはここで私たち信仰者がうめいている原因を伝えようとしたのです。私たちがなぜうめいているのか、なぜこの罪に悩んでいるのか、なぜ悲しんでいるのか、その原因をここで教えようとしたのです。その原因は、私たちが「御霊の初穂いただいている」から、だから、私たちはこのようなうめきを持って歩むと言うのです。御霊の初穂をいただいているから心の中で罪を悲しみ続けている、つまり、うめき続けているのです。パウロはそのように言うのですが、そのことをもう少し理解するために、当然この「御霊の初穂」とは何かを考える必要があります。

◎御霊の初穂とは？

皆さんも「初穂」ということばはよく耳にされているでしょうか？聖書の中に出て来ます。旧約聖書では「初穂」とは「人が神にささげるもの」です。出エジプト23：19には「あなたの土地の初穂の最上のものを、あなたの神、主の家に持って来なければならない。…」とあります。つまり、一番良いもの、最初の収穫の中で一番良いものを神のところに持って行きなさいと言うのです。また、レビ記23：10-11にも「イスラエル人に告げて言え。わたしがあなたがたに与えようとしている地に、あなたがたがはいる、収穫を刈り入れるときは、収穫の初穂の束を祭司のところに持って来る。：11 祭司は、あなたがたが受け入れられるために、その束を主に向かって揺り動かす。祭司は安息日の翌日、それを揺り動かさなければならない。」とあります。ですから、まず覚えておきたいことは、初穂とは旧約聖書の中では神にささげるものなのです。ところが、新約聖書にもこのことばが出て来ますが、新約では違うことを教えています。それは神にささげる物だけでなく、神から与えられるものに対しても「初穂」と言うのです。

(a) 最初に救われた人に対して

ローマ16：5に「またその家の教会によろしく伝えてください。私の愛するエパネトによろしく。この人はアジャでキリストを信じた最初の人です。」とありますが、この「最初の人」が今私たちが見ている「初穂」ということばです。同じことばです。Iコリント16：15にもこのことばが「最初に救われた人」に対して用いられています。「兄弟たちよ。あなたがたに勧めます。ご承知のように、ステパナの家族は、アカヤの初穂であって、聖徒たちのために熱心に奉仕してくれました。」、ステパノの家族はアカヤ地方での初穂である、最初に救われた者たちであると言うのです。ですから、神にささげるものから神が与えてくださるもの、特に、ここでは神が救ってくださった最初の人に対して「初穂」ということばが使われているのです。

(b) 最初によみがえった人に対して

また、皆さんよくご存じのように、よみがえりに関しても、最初のよみがえりに関して「初穂」ということばが使われています。Iコリント15：20、23にキリストの復活に関して「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」、イエス・キリストは死者の中から最初によみがえった方です。「…:23 しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。」、これは復活の順番のことを言っているのですが、最初にこのキリストがよみがえる、その後、キリストを信じている者たちがよみがえるのだと教えるのです。ですから、最初に救われた者たちだけでなく、最初によみがえる人、イエスですが、その人に対してもこのように「初穂」ということば使われているのです。

(c) 神の御霊

もう一度、ローマ書に戻って、この「御霊の初穂」についてももう少し考えて見ましょう。8：23には「御霊の初穂いただいている」とありますが、これは何のことでしょうか？パウロは神は何をくださったと言うのでしょうか？「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、」と書かれています。パウロは「初穂」と間違わないように「御霊の初穂」と説明しています。パウロが言わんとしている「初穂」とは「御霊」のこと、聖霊のことです。聖霊なる神が与えられたのは、今与えられ喜んでこの救いが後には完成するという約束、その保証なのです。というのは、「初穂」とは最初の穂、最初の収穫のことです。最初にとれたもの、そして、その後には収穫が続くのです。「初穂」で終わりではないのです。その後にも続くものがある。だから、「初」という字なのです。

パウロがここで「御霊の初穂」と言っているのは次の通りです。聖霊なる神は内住しているクリスチャンの中にすでに働きを始められた、イエスを信じたときにあなたの内に聖霊なる神の働きはもうすでに始まったのです。そして、クリスチャンはその聖霊のみわざを通して、その働きを通して、天において私たちがいただく祝福のごく一部を、今この地上にいて味わうことができるのです。天において私たちがいただく祝福の一部を、この地上にいて私たちは味わうことができるということです。

マッカーサー先生は「信者の中に、また、信者を通して為される内住する聖霊の働きは、霊的初穂の見本である。それらは天において我々を待っている栄光の前触れである。」と言っています。どういことでしょうか？喜びに関して考える時、私たちはイエスを信じる者として主に忠実に歩んで行こうとすると、残念ながら、いろいろな困難を経験します。今までになかった摩擦を経験します。辛いことがたくさんあります。悲しいこと、苦しいことがあります。そのような中でその重荷が段々重くなって、本当に辛いなど思うことがあります。でも、その中で私たちが「すべてをゆだねなさい。」と主が言われるように、その重荷をゆだねるときに主は私たちにすばらしい慰めをくださいます。恐らく、多くの皆さんがこのことを経験されていると思います。重荷をずっと自分で持ち続けることはできます。でも、それではもっとしんどくなって行きます。希望が見えなくなって、感謝がなくなってしまいます。でも、主が望んでおられること、命じておられることは「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」(Iペテロ5：7)です。私たちはこのような特権にあずかったのです。神にもって行くことができるのです。そのときに感謝なことに神は私たちの心を慰めてくださるのです。

皆さん、そのようなことはありませんか？そうすると、私たちは主が身近にいてくださることを確信します。そして、心からの感謝と賛美が湧き上がって来ます。「神さま、ありがとうございます。私を覚えていてくださって、このような励ましをくださって…」と。そのようにして神と自然に語り合っている自分に気付くことがあります。信仰者である皆さんは多分そのようなことを何度も経験されていることでしょうか。そのときに説明のつかない喜びを私たちはいただいているのです。問題がなくなった訳ではないけれど、神がくださる喜びをもってその神を称えるのです。私たちは「では、私たちが天に上がったときには、今、私たちが持っているこの喜び、この感謝よりもはるかにすばらしい喜びが感謝が待っている。いったい、どのようなことが起こるのだろうか？」と。皆さん、喜べないときに喜ぶことができるのは私たち信仰者だけです。このことは世の中の人たちには説明が付かないのです。理解できないことです。私たちが主の前に立ったときにそこには喜びだけがある、そこには感謝だけがあるのです。神が与えてくださる喜び、神が与えてくださる感謝で私たちは満たされるのです。そして、今、この地上にあっても、状況が自分の思うように進んでいるから喜ぶ、それはだれでもできることですが、そうでなくても喜べるのです。つまり、神がくださる喜び、感謝を私たちは経験することができる。私たちは神の祝福を今地上にいて少し味わうことができる、パウロはそのように言っているのです。

例えば、「礼拝」を考えてください。今日、皆さんは礼拝するために集まって来られました。私たちはみな不完全であり罪人です。でも、一人ひとりが本当に神の前に罪を告白して、神を心から見上げて賛美をささげ、神に礼拝をささげるときに、その礼拝のそこにいることが祝福になるのです。心が本当

に祝される。ですから、スクリーンに字が出ているから「ハレルヤ」と言うのでないのです。心から神に「ハレルヤ！感謝します。神さま、ありがとう。」と、そのように言うとき、私たちは天に上がって神を心から崇めるときにどのような礼拝になるのか、その礼拝のすごさを思って私たちの心は感動します。天に行ったときにすばらしいものが約束されているけれど、今この地上においても私たちは祝福を経験できるのです。

私たちは「御霊の初穂」をいただきました。神は私たちを通して働きを為しておられ、私たちの内に働きを為しておられます。私たちがその働きを見るときに、天に行った時にある祝福を今味わうことが許されているのです。だから、そのことを経験することによって、私たちは益々天を待望するのです。罪のない者たちが集まってともに神を称えるとき、どのように賛美するのでしょうか？どのような礼拝なのでしょう？皆さん、想像出来ますか？でも、かなりかけ離れたものであっても、少なくとも、少しはそれに似たことを今地上でも経験することができる、そのことをパウロは私たちに教えるのです。私たちは救われている者として、このような態度をもって生きるのです。そして、このような態度を持って生きる者たちは救われているとパウロは言うのです。

(2) 神を愛している

もう一つは、「神を愛していること」がこのような態度の理由です。というのは、みことばは私たちに、神を愛することがどのようなことかを教えているからです。詩篇97：10にこのようにあります。詩篇97：10「主を愛する者たちよ。悪を憎め。主は聖徒たちのいのちを守り、悪者どもの手から、彼らを救い出される。」と。また、箴言8：13には「主を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりと、おごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。」とあります。ですから、聖書が私たちに教えることは、神を愛することは言い方を変えるなら、罪を憎むこと、悪を憎むことであるということです。先ほど、私たちが見たように、心の中に本当に深い悲しみをもっている、神を喜ばせたいけれどそのようにしていない自分、その罪に対して嘆いている、その様な嘆きをするということは私たちが神を愛しているからです。神を愛しているから、その方に喜んでいただきたい、神を愛しているから神を喜ばせたい、でも、それができていない自分に対して悲しみを覚えるのです。

ですから、パウロにとっての深い悲しみは「罪を犯す」ことでした。みこころに背くことは彼にとって大きな悲しみです。みことばに対する不従順も大きな悲しみです。主なる神を悲しませる、それは彼が一番望んでいなかったことです。自分の本当の姿を見せられたとき、パウロはこのように叫びます。ローマ7：24「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」、彼が待望したのはこの罪のからだから解放されることです。なぜなら、彼は自分の生き方、その行ないを見て、私のしていること、私が想像すること、考えていることは、救われていながら神の前に悲しまれることを継続しているからです。私は何とあわれな者だ！何と情けない者だ！と。でも、そこに希望があるのです。このからだを神が新しくしてくれるという希望です。

このような態度を持って生きていたパウロ、そして信仰者たち。そのような生き方をしたのは、救われているからであり、また、彼らが神を愛しているからであると、パウロは言いました。そのように考えたときに、皆さん、私たちはこのように罪を扱っていますか？このような思いをもって私たちは日々を過ごしていますか？本当にうめいている、神を悲しませることが私にとって一番悲しいこと、一番辛いことだ、みことばに従って行かないこと、みこころに従って行かないこと、それが私にとって一番の悲しみであると、そのように本当に心から思いながら生きていますか？

適用：どうですか、信仰者の皆さん、あなたの主に対する愛に翳りはありませんか？考えることが必要です。例えば、私が皆さんに「あなたはイエスさまを愛していらっしゃいますか？」と質問すると、皆さんは間違いなく「はい」と言われるでしょう。では、あなたの愛は成長していますかと問われると、答えるのは難しいでしょう？ひょっとすると、私たちの愛は段々目減りしているかも知れません。

パウロが私たちに教えているのは、愛において確実に成長している者の姿です。神を確実に愛している者の姿です。彼は罪に対してそこから離れたい、神だけを喜ばせる、そのような生き方をしたいと願っていました。私たちはそのような生き方をしているかどうかです。信仰者の皆さん、もう一度イエスの十字架を見上げることです。そして、主の犠牲的な愛を思い出すことです。それだけではありません。私たちは聖霊なる神に満たされて、つまり、神の助けをいただいて日々を過ごして行かなければ無理なのです。信仰生活において主の助けが不可欠です。「どうぞ主よ、私の弱さを助けてください、あなたをもっと愛する者に変えられたいから。そのためにあなたの十字架をしっかりと見上げて、あなたが為してくださったみわざを覚えながら、それに応えて行きたい。どうぞ私を変えて行ってください。」と。パウロはこうしてこのような希望に対する態度をもっていることの原因について教えてくれました。

C. キリスト者の望み 24-25節

最後に、24-25節を見ると、彼はもう一度キリスト者の望みについて教えます。「私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。:25 もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。」、望みをもって生きることはクリスチャンであることの特徴です。それが24節の最初に記されています。

1. キリスト者の特徴 24 a 節

「私たちは、この望みによって救われているのです。」、ここを見ると、パウロはあたかも望みによって救いを得るかのように語っていると思いませんか？救いを得るための条件が「望み」であるかのように。もしそうなら、パウロは彼の神学において全く違う立場を取ることになります。しかし、彼が一貫して教えていることは「救いは信仰のみによって与えられる」ということです。如何なる行ないによっても救いを得ることはないと言います。そのパウロがここで何を言いたかったのでしょうか？まず「この望み」とは23節に関連しています。「望み」という名詞は文法的に見ると、あるものとの関連を示しています。それは「救い」です。つまり、パウロはここで「望みによって救いを得る」と言ったのではありません。「望み」は「救いについて来るもの」、この二つは引き離すことができないと言ったのです。ですから、この新改訳聖書では「この望みによって救われる」と訳されていますが、他の訳では「この望みのうちに救われている」と訳しているものもあるのです。

黒崎幸吉先生は「希望に生きる者として我々は救われたのだ。」と言っています。すばらしい表現です。つまり、私たち信仰者、罪を赦されたクリスチャンたちは希望に生きる者となったのです。希望を持って生きる者と生まれ変わったのです。ジョン・マレーという神学者はこう言います。「『希望によって』というこのことばは過去において与えられた救い、今現在所有している救いは、希望によって特徴付けられているという事実を語っている。」と。過去において与えられた救い、今所有している救いは別のものではないのです。今も救われ続けているのですが、それは「希望」という特徴がある、つまり、救われている私たちは希望を持っている者、望みを持って生きる者だと言うのです。

2. キリスト者の望み 24 b-25 節

24節の後半からは、目に見える望みと見えない望みが記されています。「目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。:25 もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。」、目で見ているものは望みではないと言うのです。なぜなら、「望み」はそうなれば良いという願いです。「希望」はあることの実現を願うのです。その望み、希望が叶うならもうそれは望みでも希望でもありません。こういうことがあればいいなあ、こういうものが与えられるといいなあと思って、それが与えられたらそれはもう希望ではなく、現実のものです。だから、私たちは目で見ているものを待っているのではなくて、目に見えないものを待ち望んでいるのです。そして、最後に彼は面白いことを言っています。「もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。」と、まだいただいていないものを待ちながら忍耐をもって生きています。このような信仰者の生き方を最後に表わすのです。

パウロはこのことをⅡコリント4:18でこのように教えています。「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」つまり、見えることに心を留めないということは、私たち信仰者とはこの現実ではなくてその先、未来を見て生きる者たちだと言ったのです。周りにいろいろなことが起こるけれど、信仰者はその先を見ているというのです。最初に話したように、先が見えなくて今のことしか見えなかったら、私たちは希望を失います。なぜなら、苦しみの連続だからです。でも、私たち信仰者はその先を見ているのです。パウロはここでそのことを言っているのです。「目に見えるもの」、つまり、現実のものではなくて、「見えないもの」、先のもの、未来のものを覚えて私たちは生きています。この地上のことではないのです。永遠を覚えながら私たちは生きています。なぜなら、この世のものはすべて滅んでしまうからです。しかし、神、神の約束は永遠に堅く立つのです。神は永遠に続き、神の約束は永遠に変わらないのです。

ですから、今私たちが見ているいろいろな問題に目を留めてしまうのではなくて、その先にある永遠に続く神の約束を見ながら、私たちは今日を生きて行くのです。レオン・モーリスという聖書学者はこの「忍耐をもって熱心に」ということばに関してこのように説明を加えます。「最も激しい戦いの最中にある兵士が、どのような困難の中にあっても、怖じけるのではなく勇敢に戦い続ける態度、それがこのことばが意味することだ。」と。戦いは大変です、最前線にいて戦いは厳しいけれども、そこで怖じけるのではなく、勇敢に戦い続けて行く姿、それがパウロがここで言い表わす「忍耐をもって熱心に」ということばだと。

適用：そして、最後にパウロは言います。私たちは天国を満ち望みながら生きる者に生まれ変わった。

でも、それは私たちが抱えている現実のいろいろな問題からの逃避という消極的な生き方をする者ではない。却って、私たちは問題の中にあっても積極的に、目をしっかりと神に向けて、神の約束をしっかりと見て、神の与えてくださる勇気をもって、勇敢に信仰者としての戦いを戦い続けて行くと。なぜなら、皆さん、私たちが天に行ったときに、あなたの信仰者としての歩みに対して神は褒美をくださるからです。

パウロはこのように言いました。ローマ8：18「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」、今多くの問題があるけれど、永遠を見たときに、それは比較にもならないと。皆さん、あなたはこの地上のために生きていますか？この地上のためだけに生きていますか？地上で何を求めるのか、どのような生活をするのか？どのように余生を過ごすのか？と、私たちがそのようなことばかりに目を向けているのなら、私たちは神の喜ばれる生き方をしていません。私たち信仰者は、この地上のことよりもその先を見ているのです。主にお会いするそのときを待っているのです。そして、そのときに主から喜んでいただけるようにと今を生きるのです。どんな苦しみもどんな問題もそれはなくなりません。でも、神が約束してくださった永遠の祝福はもう私たちの前に約束されて、それは据えられています。その約束をしっかりと覚えながら、備えてくださった神の助けをいただいて生きることです。

信仰者の皆さん、そのように生きて行きなさいということです。なぜなら、パウロはそのように生きたからです。そのように信仰者は生きて来たからです。そして、そのように生きることができると、神はあなたに励ましのことばをくださるのです。「このようにして歩んで行きなさい。」と。そして、そのときに、神はあなたに豊かなすばらしい祝福を与えてくれる、その時を待望しながら今日を生きて行くことです。